

文学講義の出来上がるまで

文学部 山本 卓



昭和22年、埼玉県狭山市生まれ。中学、高校時代から文学書の乱読を趣味とする。大学時代にはフランス文学を専攻。特に現代作家ル・クレジオの作品に強く興味を引かれる。大学院に進学してから、一転してアラゴンの後期小説に開眼。「小説の嘘」の醍醐味を教えられてのめり込む。その後、一貫して原初的な言語の発生現場を探し求めている。(やまもと・たかし)

講義録の作成には教員の誰もが苦労を重ねていることだろう。今回のモノグラフでは主として語学を担当してきた一教員が、初めての講義科目を担当して四苦八苦した経緯を報告する。とりわけ言語生産装置としてのコンピュータ、ワードプロセッサなどの文明の利器を駆使しての過程に注目していただきたい。

昨年度の後期には初めて共通教養の「文学」を担当して、とりわけ講義録をまとめるのに四苦八苦した。私の専門はフランス小説だ。だが、今まで文学の講義を担当する機会には恵まれなかった。語学講師としてずっと生活してきたので、講義科目を担当するのは今回が初めてだったのだ。

学生諸君の前で果して上手に講義が成立するのかと不安だった。せめても念入りの講義録を用意して学生諸君の前に立とうと決心した。

だが、案の定、講義録の作成は困難を極めた。私自身の文学観を学生諸君の前に展開するという最低限度のノルマを初めから自分に課したからでもあった。

授業の規模は「登録学生数が150人」とかなりの多人数だ。また学生諸君も越谷キャンパスのすべての学部からやって来ている。突っ込んだ内容も必要だが、それ以上に幅広い関心に答える授業が望まれる。

ともあれ学生諸君に新しい視点を提供しながら、学生諸君との双方向の対話ができるような授業を作っていくことを心掛けようと思った。

そのために以下のような方針を決めて授業

に望むこととした。

- ①毎回、学生諸君にアンケートをして、学生諸君の声のフィードバックに努める。
- ②学生諸君の間まで出掛けて行って声を掛ける。(インタビューの試み)
- ③学生諸君の誰でもが知っているようなテーマを掲げていく。(専門知の一般化)

例えば『星の王子さま』を素材にした講義の時にはワイヤレスマイクを片手に学生諸君の間に突撃して学生の声も聞いた。どうやら語学の授業の際の机間巡視の習慣が抜けていないのである。(この方法は「突撃インタビュー」と命名している。)

こうして、すでに無事に十二回の講義を終わらせてほっとしている。

思い返せば一週間で講義録と配付資料を作るのはやはり大変な重労働だった。五時半に起きて夜の十一時半まで仕事を続ける「研究日」もあった。二年前に買ったすでに中古のマッキントシュが講義録を作成する縁の下の力持ちになってくれた。その辺の経緯を記してみよう。

まずは、あるアイデアを巡ってのメモを作成する作業から一つの講義の準備に取りかか

った。自分の頭の中で感じた「文学とは何なのか？」という疑問を問い詰める作業だ。これが毎回の授業の基本となる。講義録の骨格ができるまではブレインストーミングの時間が不可欠なのだ。

このメモを OASYS-Pocket3 という重さ 490 グラムの可愛いワープロ・マシンでテキストファイルに書き直す。この作業は暇を見つけて行うわけである。

OASYS-Pocket3 でのワープロ作業は、時には大学への往復の電車の中で行うこともある。



オアシスとマックのリンク……

まとまってきたメモは自宅のイマジオオアシスという中型のワープロに流し込んで清書を済ませ、プリントアウトする。(この二台のワープロ相互のデータ交換に関しては人間科学部の三本松先生に色々とノウハウを教えていただいた。)

次には感熱紙にプリントアウトしたメモ原稿に赤のボールペンで書き込みしていく。疑問点や必要な資料についての書き込みもどんどん行っていく。資料には芥川竜之介や夏目漱石の引例などもどんどん書き込んでいく。

資料への書き込みは柔らかな鉛筆を利用して、すーっとマークする。また、資料には付箋紙を立てておくのも大切なノウハウの一つだ。

こうした作業と並行して昔から書き溜めておいた日記の中からも文学関連のファイルを切り出す。実を言えば昨年の四月からは(講義を担当するという意識が有ったために)意

図的に日記の中に「文学メモ」を書き込むようにと心掛けていた。

日記は私の悪習である。

とりわけ 1987 年にワープロを本格的に使用しはじめてからは、一日 1200 字のノルマで日記を記し続けてきている。半年で 40~45 万バイトほどの量になり、電子書店でダウンロードすると 22 万バイトほどの漱石の『草枕』よりも量だけは長くなる。

日記の中に折りに触れて書き込まれた、この「文学メモ」の部分のみを後から切り出して加工するわけなのである。

切り出した「文学メモ」のファイルをマックintoshに流し込む。マックの画面上で複数のエディター画面を同時に立ち上げてまとめる。カット・アンド・ペーストで一つのテーマに沿った関連ファイルにまとめることができる。

マックで作成したテキストファイルを再び OASYS-Pocket3 に流し込んで加工する。それに再び赤ボールペンを利用して修正を加える。

こうした作業を通じて感熱紙の十数ページの束が出来る。これから解体・再構成の作業に取りかからなければならない。

カッター台の上に感熱紙を置いて、意味のひとつまとまりとなりそうな「単位」ごとにカッターで解体する。解体した「単位ごと」のファイルを大きな机の上に全部広げて整理しなおす。上記の作業は K J 法の作業に通じるようなブレインストーミングである。この方法を、悪趣味だと反省しつつ「切り裂きジャックの事件簿」とネーミングしておいた。



感熱紙で K J 法のように……

講義録は最終的にはB 5の 23 行の余裕のあるフォーマットでプリントアウトする。教室でも、これに目をやりながら授業を進めるわけだから読みやすい方がよい。

学生諸君への配付資料はB 5の52行×2枚=104行(B 4)になる。かなりの量が有る。400字詰め原稿用紙に換算して10枚程度の量が有る。講義録の作成と資料の作成とのこの作業が終わるとへとへとだ。だが一仕事の片づいた夜更けには、書くことに熱中した一日の終わりの充実感も訪れる。

完成したファイルは再びマックに流し込んで、作成済みの全講義録をまとめた「長いファイル」にする。この「長いファイル」はマックから重さ320グラムの小型パソコンHP 200L Xに流し込んで電車の中で再読する。実を言えば私の膨大な日記もこの小さなパソコンの中にすっぽりと入り込んでいる。電子書店パピレスからダウンロードした大好きな漱石の『草枕』もデジタル・ブックとして入り込んでいる。(HP 200L Xに関しては大先達に加藤一郎先生から色々と教えていただいた。先生は我が大学におけるPC使いのパイオニアの一人である。)

さて、いよいよ授業だ。

授業での資料の配布には、ボランティアの学生四名をこちらから指名して協力してもらおう。実を言えばこれも学生諸君の「動く能力」(乗りの良さ)を活性化するための意識的な配布作業なのである。

毎回、学生諸君にはB 6の小さな紙を利用して、その回のテーマに沿った作文をもらっている。

私が喋る時間は毎回約60分、資料配布に約10分、作文に約20分という割合の時間分割である。

学生諸君の書いたものも回を追うごとに次第に個性が出てくるので楽しい。興味深く読ませてもらった文章も数多く有る。

授業を行っていく上でのアイデアについても語っておこう。

「ジャンケン大会」を毎回実施してみた。

このアイデアはJ HUG (Japan Hyper card User Group) というマックのユーザーグループのミーティングでの余興を真似しているのだ。

まずは学生諸君全員を起立させる。

次に私と学生諸君とでジャンケンをする。

私に勝った学生諸君のみが立ちつづけることができる。負けとあいこの学生は席に座る。

何度かジャンケンを繰り返して勝ち抜きの一、二名を決める。

勝ち抜いた学生二名には文庫本を進呈する。優勝者の賞品は、時には神奈川県立文学館の絵はがきであったりもする。

学生諸君に書いてもらった感想文は次回の授業計画に生かすように心掛ける。また配付資料にはパソコン通信のフェイスマークなども書き込んで、学生諸君にも親しみやすくする。私が作った下手な短歌や回文を配布資料に書き込むこともある。(もともと今回のメインテーマは言葉と戯れることだった。)

神奈川文学散歩などの「意図的脱線」の部分を配布資料に盛り込むこともある。出来るだけ学生諸君の関心を引くようにと工夫している。

今年は冬休み中に「東京文学散歩」の課外授業も計画した。寒風の吹きすさぶ中での散歩の参加者は三名に過ぎなかったが、夭折詩人・立原道造の墓を詣でたり愛玉子の店に立ち寄ったりと楽しめた。

ワイアレス・マイクを利用した突撃インタビューは、自分では面白い試みだと思ったのだが余り上手く行かなかった。学生諸君に即興の質問をぶつけていくのにも限度が有るのだ。やはり質問の項目などを前もって十分に練っておく必要も有るのだ。そういう意味では授業の組み立てはドラマの演出にも似ている気がする。小さなクラスでの授業なら成立する方法も多人数の授業ではなかなか難しい部分が有ると痛感させられた。

だが、初めての体験だった教養科目での講義は、私の中で眠っていた数々の言葉たちを目覚めさせてくれるという効用が有ったようだ。学生諸君の寛容さに触発されつつ生まれ

てきた 226754 バイトの講義録の言葉たちに
元気づけられている私である。



200LXで読む日記や漱石